

# 共同体のことども

(大阪) 余田博通

昨年十月の鳴子の大会は、大へん愉快であつた。地方にいる者は平素話し合う機会も殆んどないし、小生のごとき新入会者にとつては多くの方々とお近づきの益も交すことができ、いろいろの考え方を聞くことができて、また種々の便宜も与えられて心温まる思いをしたことは忘れぬこととならう。高橋武蔵作るところの伝統の鳴子こけしは私の前の本立ての上に立つている。あれからもはや月の変ること五度、いまさら鳴子についての感想でもあるまいが、会員諸氏に感謝しつつあの時のことを思い出しながら、求められるままにいさゝか駁文を弄してみたい。

今年度の共通課題が「村落と政治体制」であつてみれば、この課題を真正面に問題にしようとするれば、やはり共同体をどう考えるかが明らかになつていなければなるまい。この点で鳴子大会は大きな問題を私に与えてくれた。こまかい点で種々教えられたことも多かつたが、ここでは私が私なりに受けとつた問題を簡単に記してみたい。

オ一に、共同体をどのように考えるかである。これは実は最終的な問題であり、それを実証を通して明らかにしようとしていたのが一同の意図であつたと思うが、しかし実証に

とりかかる前のプライマリな段階における共同体の概念について一応すつきりとさせておく必要があつたように思う。この点において、それが生活上とりむすばなければならぬ家の集団あるいは社会的諸関係の累積体であるということ、最も基礎的な一致点としてあつたと思う。しかし共同体はそのような一般的なものではなく、いわば前近代的なものとの概念されていたのである。この理解の相違は簡単に分ることだが、語が進むに従つて社会学では、経済学では、ということが出てきたのは、根本的にはこの相違が立場の相違としてあつたのではないかと思う。

ところで次の問題は、前近代的なものとして理解した上でのことだが、累積状態にある個々の集団または社会諸関係、共同組織が共同体とよばれるのか、あるいはそれらの累積体が共同体であるのか、これが明確でなかつたので、混乱をきたしたように思う。これは先の点に関連するのであるが、共同体が分解するにも拘らず再成し累積体が同一円上に置ならない状態が生じてくるという変化に基づくものと思われ、個別集団と累積体とは概念的に区別して考えておく必要があつたのである。

オ三に、これは分りきつたことであるが、現状分析の立場からいえば、共同体を村落共同体と家共同体とに明瞭に区別して論ずべきであろう。この点は実はオ一点と深い関係があるように思われる。共同体の主要な契機は、

家の自立性が弱く相互に依存しなければ生活できない事情だという理解が根底にあつたと思うが、自立できない為の相互依存性ということの理解の問題がある。例えば本家―分家親方―子方、あるいは地主―小作等の関係がある場合に、それらの双方または分家や子方や小作等が生活上自立できない事情にあるという理解がその一つである。いま一つは、そのような関係がない場合、もしくはそういう関係を捨象した場合といつてもよいが、そのような時でも生活上自立できないという事情があるという理解である。一つの家を中心とする労働組織やその他の生活上の諸組織があるいはそれらの累積体が共同体であるという考え方は、前者の理解を基礎としている。

これに対し村落とか自然村とかいわれるものを共同体とする考え方は後者の理解の上に立つている。とは言えないだろうか。これは生産力の発展による家の自立性の程度の問題が根底にあることは言うまでもないが、現状分析の立場からいえば、家が何から自立できないか、何から自由になり得ないかということが意識的にとりあげられていなかつた点に問題があるのではないだろうか。分家として本家から自立し得ないという点に着眼すれば前者の理解になり、むらとしての取りきめやむらの仕事等から自由ではないというように注目に注目すれば後者の理解となる。どちらともかく前近代的な関係として見ている限り、共同体であるというのは正しいとされている

と思うのだがしかしまたそれ故に話がヤヤコシクなつたように思われる。私はここで家共同体とをはつきり区別してかかる必要を感じた。そんな事は分り切つてゐるという声や、それがはじめから分つてゐれば何も苦勞はないという声も聞えそうだが、私は次のように考へてゐる。ある家を中心としていろいろの關係があるが、このような諸關係を明らかにすることから出發するという方向の研究とこのむらとはか、あるいはあの人はこのむらの人間ではないとか言う場合のむらを明らかにしてゆくことという方向との研究上の区別を明確にすべきだということである。煙山の例をあげて恐縮だが、高橋家其他三家を中心とする諸共同体が強調されてゐるが、他方虫送りや大木神社の祭のようむらとしてのまともにも考へられるのであるから少くとも大木・松ノ木・提川目の全部の家をとり、その一体性を究明して行くということ、そういう方向からの分析がなせられてはならないということである。遼山の場合はこの一体性が事実弱いように思われるが、なお検討の余地があるような気がする。村落について共同体を論じてゆくこととするとき、これまでなされてきたところの、一方において家共同体の、他方において村落共同体の研究成果を顧みながら、それぞれの視角から兩者のカミ合ふ具合を検討してゆくことが必要と感した。

ところで才四に、右のように考へるとしてもそれは家共同体・村落共同体をどのよう

に考へて進むべきかということが問題となる。この点で先学の研究成果に教えられるところ大であるが、その検討を通して自らの概念図式もしくは構造図式を作つてみなければならぬ。システムとかノルムとかがここで重要な問題点として浮び上つてくるが、前近代のこの限定をつける場合をれらをどのように考へるかが問題であらうと思ふ。ここでそれを述べるわけにはゆかぬが、その場合に基本的に重要な点はそれらを構成する家の主体とその物質的基礎であり、とりわけ主体とその物質的基礎の二重の性質、共同態性と相對的獨立性を明らかにすることだと思ふ。物質的基礎についての二重性はこれまで主張してきたことであり、この考へをもつと進めなければならぬと考へてゐるが、家の主体、家族の二重の性格については未だふれていない。適當な機会に考へてみたいと思つてゐる。ともかくこれらのことを拠点にしてそれらの具體的論理構造を究めることが重要だと思ふのである。単にシステムやノルムを事実の中に求めることに終つてはならない。

地域性の問題とか、水利組織の問題とか、共同体の解体とか種々問題があるが、次から次へと仕事がおし寄せてゐる時期なので、甚だ初歩的なつまらないものになつてしまつたが、今回はこれで失礼します。